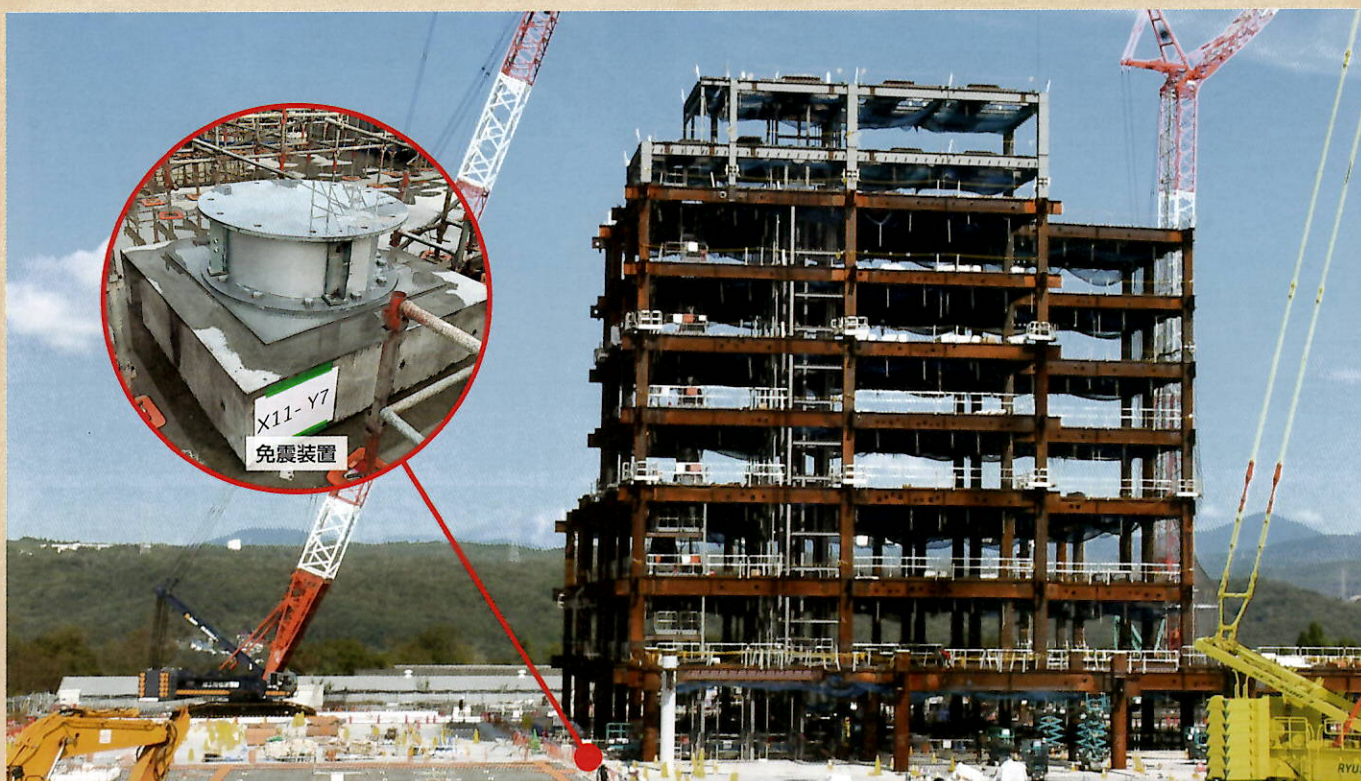


新病院建設だより

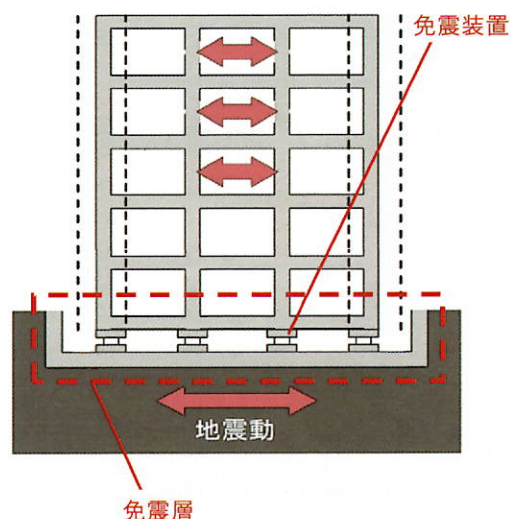


新病院本棟の鉄骨建て方工事中です。建物全体の約1/4の鉄骨の組み立てが終わりました。(令和6年10月時点)

新病院は、地階に免震装置を設置した免震建物です。免震建物は、一般の建物と比べて地震による激しい揺れを受け流し、建物、家具、人への被害を少なくすることができる建物です。建物および医療機器の被害を抑えることで、大地震が発生した場合でも病院機能を維持することができます。

令和6年1月1日に発生した能登半島地震では多くの病院が被災しましたが、免震建物の病院は被害が少なく、早期に医療活動を再開することができました。

新病院は、大災害が発生した場合でも病院機能を維持し、医療活動を継続できる病院づくりを行っています。免震構造の採用のほかにも、2回線受電方式の採用、ライフライン途絶時に3日間病院機能を維持できる設備の整備、耐震性の高い配管による上水道の整備など、様々な対策を行っています。



建設現場の状況



南東側から見た建設地 (令和6年10月末日)



上空から見た調整池

新病院建設工事の進捗状況は10月末時点で進捗率15%です。2月から基礎工事を開始し、8月には基礎部分に免振装置を設置しました。現在は鉄骨建て方工事を行っています。

2024年 (令和6年)	2025年 (令和7年)				2026年 (令和8年)
10月～12月	1月～3月	4月～6月	7月～9月	10月～12月	1月～3月
鉄骨 建て方工事		屋上防水工事		クリーニング検査	開院準備
	外壁工事			建物完成	開院
		内装工事・設備工事			

新病院の名称等が決定

令和6年7月26日に開催された東濃中部病院事務組合議会臨時会において、「東濃中部病院事務組合病院事業の設置等に関する条例の一部を改正する条例について」が可決され、新病院の名称、診療科目等が次のとおり決定しました。

〈病院名称〉 公立東濃中部医療センター

〈診療科目〉 内科、消化器内科、呼吸器内科、循環器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、神経内科、血液内科、精神科、小児科、外科、消化器外科、呼吸器外科、乳腺・内分泌外科、血管外科、大腸・肛門外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、眼科、耳鼻咽喉科、産婦人科、泌尿器科、皮膚科、リウマチ科、アレルギー科、麻酔科、リハビリテーション科、放射線科、放射線診断科、放射線治療科、病理診断科、救急科、歯科口腔外科

※令和6年7月26日時点

シンボルマーク・ロゴタイプを制定



公立東濃中部医療センター
Tono Chubu Medical Center

新病院のシンボルマークとロゴタイプを制定しました。

ロゴマークは、名称の「Tono Chubu」の「T」と「Medical Center」の「M」をモチーフにしています。手を取りあう二人の姿は、地域のみなさまや患者さまと公立東濃中部医療センターとの確かな信頼関係をイメージしています。また、「T」と「M」には「土岐市」と「瑞浪市」の意味も込めています。

ロゴタイプは、日本語をオリジナルフォントとし、日本語・英語とも遠くから見ても、また、小さい文字でも読みやすいようユニバーサルデザインに配慮しています。

新病院内に入るテナント業者が決定

令和6年2月に新病院に入る「売店」及び「薬局・食堂」を整備・運営する事業者を選定するためのプロポーザル審査を実施し、事業候補者を選定しました。その後、事業候補者と協議を進め、以下のとおり事業者が決定しました。

各テナントは、すべて新病院1階に設置される予定です。

● 売店 株式会社ローソン



売店イメージ

● 薬局・食堂 中部薬品株式会社



食堂イメージ

公立病院経営強化プランを策定

東濃中部病院事務組合と土岐市は、土岐市立総合病院と令和8年2月に開院予定の公立東濃中部医療センターを継続的かつ安定的に運営していくために、「土岐市立総合病院及び公立東濃中部医療センター経営強化プラン」を策定しました。

● 公立東濃中部医療センター編（抜粋）

○策定期間

令和7年度～令和9年度

○新病院の果たすべき役割・機能

- ・統合に伴う医師集約による診療提供体制・診療機能の強化
- ・市外流出の多い救急医療及び各種疾患（循環器系疾患、新生物、内分泌系疾患、周産期医療等）への対応
- ・急性期医療から回復期、慢性期、在宅医療を切れ目なく提供する地域医療体制の中心的役割

○数値目標

項 目		令和7年度	令和8年度	令和9年度
医療機能等	一日あたりの入院患者数	190人	290人	320人
	一日あたりの外来患者数	700人	820人	820人
	健診者数（人間ドック）	800人	6,400人	6,400人
経営効率化等	経常収支比率	69.8%	98.8%	102.2%
	病床利用率	47.5%	72.5%	80.0%
	外来患者数	27,300人	197,620人	199,260人

○目標達成に向けた具体的な取組

医療スタッフの充実等による患者増加・増収により各数値目標を達成し、安定した経営を行えるよう運営者に働きかける。

地域医療：人口減少と高齢化が急速に進行する中、医療機関の機能分化・連携を進めながら地域全体で住民の健康的な生活をサポートするためのもの。

特定の医療機関が単独で行うのではなく、それぞれの医療機関が連携して行政や住民組織など地域全体で協力して取り組みを実施するもの。

瑞浪市：市内に新たな一般診療所が開院する一方で、市内周辺部では医療機関（一般診療所及び病院）を有しない地区が増え医療の地域格差が生じている。

2024年10月現在、陶地区・釜戸地区は医療機関の無い地区であり、稲津地区・日吉地区・大湫地区の3地区は1医療機関のみの状況にある。

僻地医療：人口減少や山間地域が多い地理的要件、かかりつけ医の高齢化等によって地域の医療環境がさらに弱体化していくことから、その対応として遠隔診療やAI問診等の導入や巡回診療車の活用を推進する。

新病院：新たな地域医療体制を構築するために令和8年2月開院をめざし「公立東濃中部医療センター」の建設が土岐市肥田町浅野で進められている。



公立東濃中部医療センター（完成予想図）

- 〈課題〉
- ・新病院の創設によって市民の健康や医療対応は十分に担保されるか。
 - ・市民の健康的な生活を守る「かかりつけ医」の充実に努めるべきではないか。
 - ・新病院を含めた医療機関への交通アクセスは万全なのか。
 - ・二つの病院が一つになることで新病院に受診者が集中し混雑しないか。
 - ・緊急時の重篤な疾患に対応する救急搬送時間に影響はないか。

東濃厚生病院の後利用

東濃厚生病院の後利用については、市からJA岐阜厚生連に対して一次医療機関として継続して頂くことなどを要望し協議が進められている。

JA岐阜厚生連は、施設の一部の建物を活用し、一次医療機関として診療所を継続する方向で検討している。継続する診療科目は協議中で結論は出ていない。

後利用については、最終的には、JA岐阜厚生連が判断する。